

氏名(本籍)	藤田良治(東京都)
学位の種類	博士(情報学)
学位記番号	博甲第4814号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	映像製作技法の実験心理学的研究 -撮影技法と編集技法が印象に与える効果-

主査	筑波大学教授	西岡貞一
副査	筑波大学教授	小高和己
副査	筑波大学教授	山本順一
副査	文教大学教授	椎名健
副査	日本大学元教授	大山正

## 論文の内容の要旨

藤田良治論文は、これまで専門家が経験と直感に頼って蓄積してきた映像製作技法のノウハウに対して、科学的なメスを入れた実証的な映像製作技法の研究である。その動機として、藤田は初心者にも分かりやすい映像製作技法の学習のための「指標」を作成することを考えている。本論文は、この実現に向けて展開し、映像製作技法が映像視聴者の印象に及ぼす効果を検討している。

まず、第1章では、本研究の位置づけと目的について述べ、映像技法の問題点と定義について概説し、論文の全体構成について記述している。映像技法は熟練者のエキスパート的な技能として発展しているだけに、その効果に関する科学的な研究の必要性が、本論文の位置づけであり、目的であるとする。

第2章では、関連先行研究について、工学的研究および心理学的研究について概説し、本研究領域の問題点を指摘している。映像技法のテキストにおいても多くのノウハウの適用や紹介に留まっており、科学的な手法を用いた研究も断片的な検討に終わっている。そこで、より体系的な研究の必要性を見ている。

第3章では、伝え手の意図を短時間で効果的に映像化するCMについて、そこで用いられている映像技法の種類の種類を調査した。撮影技法では「ズーム」が多いこと、編集技法では「カット」が95%という圧倒的高頻度で用いられていることを示した。このことは、本研究で用いる映像製作技法の適切さと網羅性の保証となっている。

第4章では、撮影技法について、その効果を分析している。そのために、撮影対象として、カテゴリーとよぶ、自然、人工、人間、および格子図形(統制条件)を使用し、撮影技法としてズーム、パン、ティルトのそれぞれ両方向の動き、合計6種類を組み合わせ、カテゴリー(4)×撮影技法(6)、の24通りの実験映像を作成した。この映像を呈示し、24尺度について7件法の印象評価を得た上、因子分析をして「インパクト度」「好感度」「活動度」「親和度」「規則度」の5因子を抽出した。その後の分析には、標準化された得点とみなせる因子得点を用いて有意差処理を行っている。

第5章では、編集技法について検討している。本研究で用いられた編集技法は、ディゾルブ、カット、ワ

イプ、そしてズームであった。編集には、各カテゴリーにつき、画面に対する対象の大きさ比率「フレームサイズ」がパラメータとして入り、これにより、たとえばズームが構成される。大きい対象はタイトル『T』、小さい対象はルーズ『L』と称し、「TT」「TL」「LT」「LL」の組み合わせができる。実験映像は、カテゴリー(4)×フレーム組み合わせ(4)×編集技法(4)の64通りになる。映像印象の評価得点について因子分析を行った結果では、「インパクト度」「好感度」「明晰度(単純, 分かりやすい)」の3因子が抽出された。ただし、ここの「インパクト度」には、撮影技法で分離された「活動度」が内包された因子になっている。結果として、インパクト度にはカット、好感度にはディゾルブが効果を示すことが明らかになった。

第6章では撮影技法と編集技法の組み合わせの効果を検討した。この検討は、両技法において共通に抽出された因子について行われ、その結果、インパクト度においては、撮影技法と編集技法における効果の加算性が認められたものの、好感度においては単純な加算性はなく、単独の技法で予測できない結果となっている。しかしながら、効果の加算性に関してその他の技法において検討する余地が残されており、今後の研究が期待されるところでもある。

第7章では、総合的な考察がなされて、印象に及ぼす映像製作技法の効果についてモデルの構築が試みられた。現在の段階では、両技法に共通に抽出された「好感度」と「インパクト度」について、また、主として結果が明瞭であった編集技法が中心の、プロトタイプとしてのモデルが考えられている。このモデルについても、他の要因が構成に組み込まれるように発展されることが期待される場所である。

以上のように、映像の印象について、撮影技法と編集技法がどのように効果を及ぼすか、実験心理学的な方法で、実証的に研究されており、どんな技法がどのような素材に効果があるか、技法の使用に関する指針が示されることとなり、最後に、映像制作技法が印象に及ぼす第一次的なモデルの構築が試みられた。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

- ①藤田良治による博士申請論文は、映像の視聴印象に及ぼす映像製作技法の効果に関する実証的な研究である。映像製作技法はいわゆるカメラムーブメントである「撮影技法」とトランジションとよばれる「編集技法」の2過程から成るが、従来は専門家の経験や直感による、エキスパート的ノウハウとして蓄積され、長期間の訓練を通して伝達されると考えられてきた。本研究はこれに科学の目を通して、映像製作技法の映像視聴印象に及ぼす効果の客観的データを蓄積し、映像製作技法に関して初心者への学習の指針を提供する可能性を問うものとなっている関連研究はいくつか先行して認められるものの、まだ数も少なく、どれも編集技法の部分的な研究に留まっている。その点で、本論文は撮影技法と編集技法の両面を問題にした総合的な研究の第一歩を示しており、また、その成果をあげていることは高く評価される。
- ②本論文では、実験計画に合わせて、独自の映像を製作して用いた。藤田は自身のカメラマンとしてのキャリアを生かし、実験計画に合わせて映像製作を自分の手で試み、実験映像の開始部分には教示やカウントダウンを入れ込むなど、実験のための映像の呈示方法にも工夫を取り入れている。すなわち、撮影と編集を自分の手で行うことで、実験計画を精密なものとしている。先行研究では既製の映像を用いたものが多いことに対して、本研究では撮影と編集を自ら行い、条件をコントロールした映像を製作して用いている点でもユニークな研究となっている。
- ③本論文は、映像について観察者の多角的な印象評価を得た最初の研究である。これにより、映像技法の効果について多角的な見方が可能になっている。そのために、藤田は24対の形容語を尺度として、セマンティック・ディフェレンシャル法を用いた7段階の評価で基本データを収集した。このデータに因子分析を適用した結果、撮影技法と編集技法に共通する因子としては「好感度」と「インパクト度」が得られ、それぞれに特異な他の因子も抽出された。その後の有意差などの分析には、因子得点(標準化されたデー

タと見なせる)を用いて実施している。このような多角的な印象の検討を念入りに行っていることは先行研究にはなかった本研究のユニークな点である。

- ④本研究は実用に供される研究であるという特異性をもっている。本研究の動機は、いわゆるエキスパートの技法と考えられてきた映像製作技法を、初心者にも分かりやすく、かつ説得力をもった形で、学習できるように、その学習のための指標を提供する基礎を築くことにあった。この点では、本研究で得られた映像製作技法の効果は、学習上の重要な指針として提起できるものとなり、実用的な価値をはらんでいる。
- ⑤本研究では、この領域の研究では初めて、映像製作技法の効果モデルのプロトタイプを呈示した。映像製作技法は本研究の範囲だけでも多岐にわたる上、全てが有意な効果を示したわけではないため、全てをモデルにまとめることは時期尚早であるとし、撮影技法と編集技法に共通な因子に限定してモデルにまとめた。このようなモデルの呈示は、この領域の研究では、初めてのものであり、その成果には高く評価するものがある。ただし、因子が共通でなくてもモデルに取り組む方策はあると考えるとき、やや不満が残る部分もある。
- ⑥撮影技法の効果について基本的理解が示された。撮影技法は本研究ではカメラ位置が固定されて、ズームとカメラ方向を変えるだけのパンとティルトが使用された。この範囲ではあるが、撮影技法が「好感度」「インパクト度」の他に「活動度」「親和度」という印象への効果が抽出された。特に、インパクト度はズームにより効果が得られていること、好感度ではズームバック以外は、全てのカメラムーブメントで効果が得られる等が実証的に示された。一方、今後の研究として、カメラ位置が移動するドリーなど、ダイナミックなカメラ移動の効果を検討するための基本的枠組みが得られたといえる。
- ⑦本研究で編集技法の基本的効果が明らかにされた。編集技法としては古典的・基本的なカット、ディゾルブ、ワイプ、ズームが使用された。ここでは、「好感度」「インパクト度」の他に「明晰度(単純さ、わかりやすさ)」が抽出された。ただし、こちらの「インパクト度」には撮影技法では分離した「活動度」も内包された因子となっている。結果として、ディゾルブは好感度を上げること、カットはインパクト度を上げることが示された。一方、近年はグラフィックの技法が発展した新技法を駆使した編集技法が続々と登場している。今後、新編集技法の研究に対しても基本的枠組みは出来たといえる。
- ⑧本研究には長い期間の努力の成果が見られる。本研究の特徴の一つとして、多くの要因を一挙にチャレンジし、前後6実験を通して脈絡を見出していること、その間に3報の審査つき論文を発表したことなど、社会人として日常勤務をこなす傍ら、多大な努力を傾注した形跡が認められる。その上で、上記に示したように、実証的な研究を仕上げ、結果としては専門家のノウハウを指示する結果が得られている。長期にわたるたゆまぬ努力と目標を達成した点でも高く評価できる。  
よって、著者は博士(情報学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。